

Step 2

研究テーマをしぼり込む ステップ

1

研究テーマを導き出すまでの流れ

それぞれの言葉の意味、違いとは？

これまでは、とくに吟味せず、研究上の関心とか疑問という言葉を使ってきました。ここで、〈研究上の関心〉と〈研究課題〉と〈研究問題〉という言葉が、それぞれどのような意味をもち、どのように違うのか、そしてどのように研究テーマのしぼり込みに関係するかについて、ちょっとマジメに考えてみたいと思います(図2-1)。

Step1ではいくつかの「どうして?」「なんで?」をあげました(p.3参照)。どの疑問も、患者さんに寄せるナースの関心から生じていることに注目しましょう。日々の看護のなかから自然とわき起こってくる、きわめて素朴な「どうして?」「なんで?」でした。

この段階ではまだ、研究の道すじが見えてきませんが、決してあせる必要はありません。なぜなら、いまはまだ〈研究上の関心〉をいだき、気づいた最初の段階であって、〈研究問題〉が見えているわけではないからです。

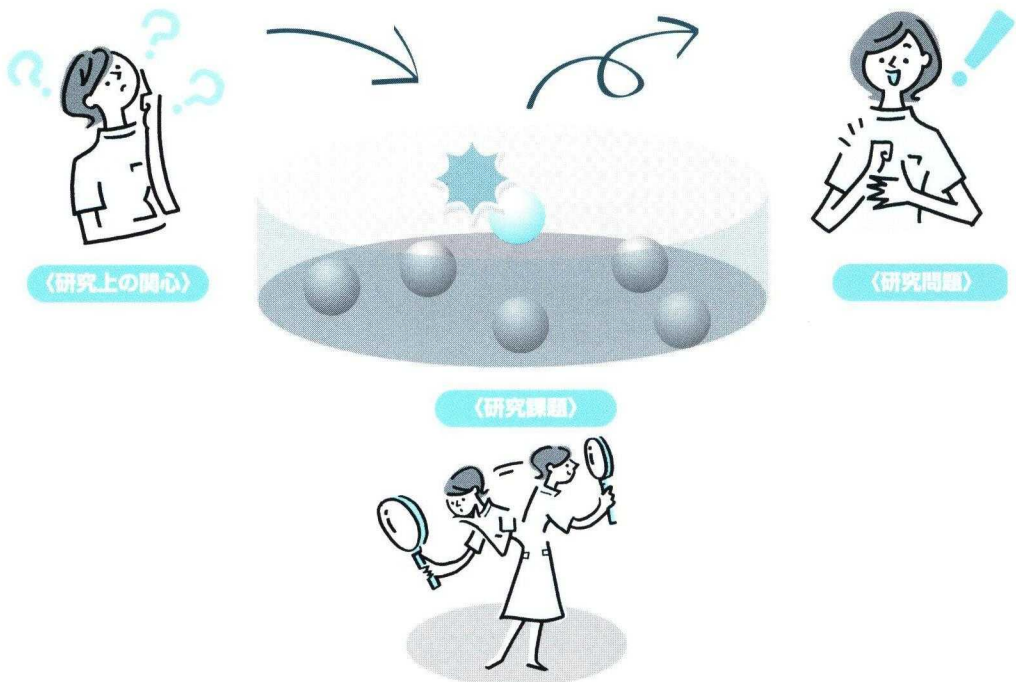


図2-1 研究テーマのしぼり込み

〈研究問題〉とは、研究のプロセスでいえば、〈研究目的〉に最も近く、洗練された、最終的な疑問であり関心です。Burns & Grove (2005/2007) によると、〈研究問題〉は、看護実践に関する知識のなかで、まだ明らかにされていない気がかりな領域であって (Burns & Grove, p.76)、〈研究目的〉を引き出し、研究の展開を指示するものです (Burns & Grove, p.87)。

〈研究問題〉の段階と、まだまだ素朴に〈研究上の関心〉をいだいている段階との中間に位置して、両者をつないでいるもの、それが〈研究課題〉です。〈研究課題〉は、〈研究上の関心〉を深く掘り下げていくことによって見えてくる、〈研究上の関心〉を取り巻くさまざまなトピックスの塊であり、そこからいくつかの〈研究問題〉が生み出される源泉でもあるのです。



Burns N & Grove SK (2005) / 黒田裕子, 中木高夫, 小田正枝, 逸見功監訳 (2007). バーンズ&グロープ看護研究入門—実施・評価・活用. 東京: エルゼビア・ジャパン.

研究の“はじめの一步”は慎重に

●一つひとつの段階を踏んで

〈研究上の関心〉に気づき、〈研究課題〉を洗い出し、〈研究問題〉を明確にして、〈研究目的〉を設定するという流れ (図2-2) は、研究全体のプロセスの“はじめの一步”にあたります。まだ実際にデータを収集したり分析したりしていないので、看護研究に取り組んでいるナースのなかには「早く切り

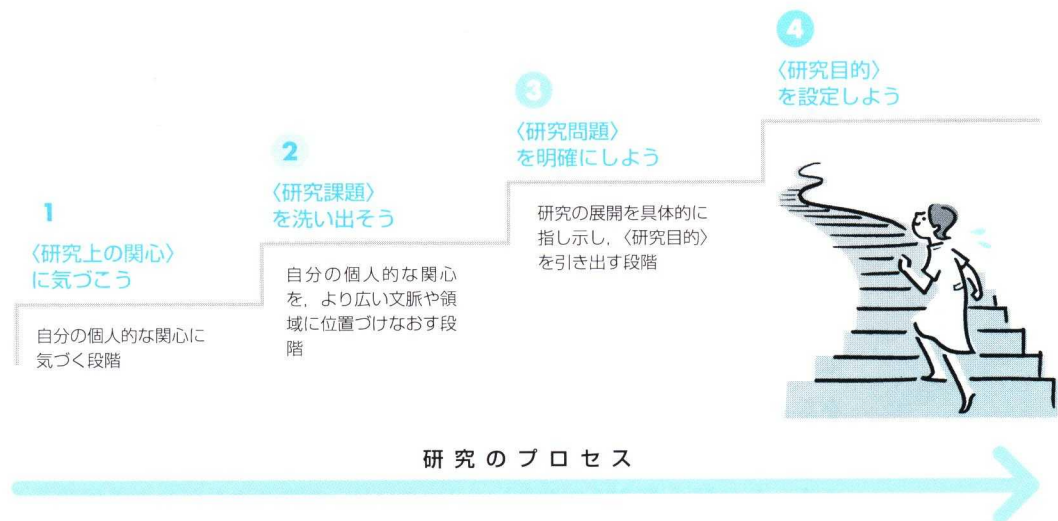


図2-2 研究テーマのしぼり込みのステップ

上げて、次の段階に行かなくちゃ！」とあせる人が見受けられます。院内教育の一環として、看護研究発表会などが年中行事に組み込まれているときはとくに、研究のデッドラインがあらかじめ決められているので、のんびりと構えていられない心境なのでしょう。

● 行きつ戻りつ、らせん状に進む

理想的なことをいえば、この段階は急ぐべきではありません。〈研究上の関心〉に気づき、それを手がかりに、関連する〈研究課題〉を調べ、〈研究問題〉を明確化するのには、多くの時間が必要です。また、その問題が研究者にとって真に関心のあるものなら、その時間はより有益に使われたことになるでしょう。

しかも、研究プロセスの“はじめの一步”である研究テーマのしぼり込みの過程は、まっすぐに進むものでもありません。〈研究課題〉について調べていくうちに当初のものとは違う〈研究上の関心〉に気づいたり、〈研究問題〉を明確化していくうちに別の〈研究課題〉がみえてきたりと、行きつ戻りつしながら、らせん状に進んでいきます。この過程があまりに大切なので、修士課程では通常、研究テーマのしぼり込みに1年あまりを費やします。

患者の状態を理解しなければ医師が治療や手術を行わないのと同じように、研究者も〈研究問題〉を簡潔かつ明確に記述できるまでは、それを解決しようとするべきではありません。研究者は、問題を解決する前に何をしようとしているのかを知らなければならないのです (Polit & Hungler, 1987/1994, p.36)。

ちなみに、院内で行われる看護研究発表会では、すでに終了した研究を報告することが多いようです。しかし筆者は、前記の理由から、それぞれの研究の進行状況を(途中なら途中経過を)発表するのが望ましいと考えています。

研究テーマのしぼり込みのプロセスにじっくり取り組んでいるのであれば、その取り組みについて発表してもらうことで、参加者から建設的な意見をもらえたり、参加者に研究的な刺激を与えたりすることができるのです。

それでは、以下に研究テーマをしぼり込むステップを段階ごとにお話します。ただし、〈研究上の関心〉についてはStep1でくわしくみてきましたので、〈研究課題〉から始めます。



Polit DF & Hungler BP (1987) / 近藤潤子 監訳 (1994). 看護研究——原理と方法. 東京: 医学書院.

2

〈研究課題〉を洗い出そう

〈研究課題〉とは

看護実践に必要な知識の中心

〈研究課題：research topics〉は、根拠に基づいた看護実践を提供するのに必要な知識の中心をなす概念を意味しています (Burns & Grove, 2005/2007, p.76)。

● 〈研究上の関心〉から〈研究課題〉へ

入退院を繰り返す患者さんに対して、あるナースがいただいた〈研究上の関心〉を例に考えてみましょう。

アルコール性肝疾患を患い、入退院を繰り返している患者さんがいます。入院すると比較的すぐに病状が安定し、退院に向けた保健指導も十分に理解できた様子で退院するのですが、しばらくすると病状が悪化し、入院しているのです。なぜこの患者さんが入退院を繰り返すのか、私はとても不思議に思っています。

ナースの目からみると、この患者さんは“健康管理行動をとれない、セルフケア能力が欠如した人”というふうに映るかもしれません。

このような場合、ナースの〈研究上の関心〉には「セルフケア能力」という〈研究課題〉が含まれていることがわかります。

「セルフケア能力」のほか、ナースによって頻繁に追究されている〈研究課題〉には、次にあげることがあるといわれています (Burns & Grove, p.86)。

- 対処パターン
- リハビリテーション
- ストレス
- 疾病予防
- 痛み
- 病気の管理
- 教育学習過程
- ソーシャルサポート
- 健康増進
- QOL など

〈研究課題〉は、患者さんに関する個人的な関心である〈研究上の関心〉を、もっと広い文脈や領域に位置づけなおして検討したときに、初めて見えてくるものです。さらにいうと、〈研究上の関心〉を足がかりにして〈研究課題〉を見出すためには、ある種の“ジャンプ”——自分の個人的な関心を、より広い文脈や領域に位置づけなおすこと——が必要なのです。



Burns N & Grove SK (2005) / 黒田裕子, 中木高夫, 小田正枝, 逸見功監訳 (2007). バーンズ & グローブ看護研究入門——実施・評価・活用. 東京: エルゼビア・ジャパン.

● 関連する概念を洗い出す

自分の〈研究上の関心〉が、どのような概念に関連するかを考えるために、私たちはある程度、先にあげたような看護実践に関連するさまざまな概念を理解することが求められます。でも、知らないからといってあきらめる必要はありません。関連しそうな概念を、そのときに調べても構わないのです。

〈研究課題〉を確認する過程では、私たちは何度も自問自答します。先の例で、ナースは初め、入退院を繰り返す患者さんは“健康管理行動がとれない、セルフケア能力が欠如した人”であると思いました。そして、そんな患者さんを気の毒に感じ、“セルフケア能力を向上させるにはどうしたらよいか”と考えはじめました。“退院時の指導を充実させるべきではないか？”“退院後のフォローアップ体制を整えるべきではないか？”……と、

さまざまな考えをめぐらせていたとき、別のひらめきがナースの頭をかすめました。

“アルコール性肝疾患で入退院を繰り返しているAさんが、「入院するとホッとするよ」って私に言ったことがあったっけ。そして、こんなことを言っていた。「病院の外にはもっとつらい現実が待ってるから、それに比べて病院は極楽だ」”

患者さんが入退院を繰り返すことは、見方を変えれば、患者さんが困難を乗り越えるために編み出した対処パターンなのかもしれません。

さらに考えていくうちにナースは、Aさんが入院中に、そして退院後に、どのような生活を送り、どのようなことを感じたり考えているのかについて、あまりくわしくは知らないことに気がつきました。そして、アルコール性肝疾患で入退院を繰り返す患者さんが体験していること全体に興味がわいてきました。

このように自問自答を繰り返しながら、ナースの関心は、①セルフケア能力→②対処パターン→③患者の体験へと、徐々に移り変わりました。この①、②、③のすべてが、この時点での〈研究課題〉であり、このあとに別々の〈研究問題〉へと発展していく可能性のあるトピックスなのです。

〈研究問題〉を明らかにしよう

〈研究問題〉とは

研究に値するものであるかの選択

〈研究問題：research problem〉は、〈研究課題〉をよりくわしく調べ、研究に値するものとそうでないものをより分けたものです。その結果、明らかになってくる、研究で追究すべき特定の関心領域です。したがって、〈研究問題〉の段階では、次のような具体的な状況までも指定されることがほとんどです。

- 誰にとっての
- 何についての
- どのような現象を
- どのように知りたいのか

● 〈研究課題〉から〈研究問題〉へ

先にあげた例で考えてみましょう。ナースは、“入退院を繰り返す患者”にまつわる〈研究課題〉として、①セルフケア能力、②対処パターン、③患者の体験、という3つの概念があることを確認しました。〈研究課題〉は、“このような概念に関心がある”といった漠然とした関心領域ですから、その概念のうちのどれが、どのように疑問なのかはまだ明確になっていません。

これらの課題が、研究に値するものかそうでないかを、どのように検討したらよいのでしょうか？

〈研究課題〉から〈研究問題〉を引き出すには、①看護の場に置き換えて確認する、②知識や経験の豊富な人から助言や支援を得る、③文献検討を行う、といった方法（通常は1つではなく2つ以上の方法）を活用することが必要です（Bailey, 1999/2001, pp.1-5；Burns & Grove, 2005/2007, pp.78-88）。

● 看護の場に置き換えて確認する

1つ目は、〈研究課題〉として着目した概念を、もう一度看護の場に置き換えて、具体的で実践的な疑問であるかどうかを確認したり、まだ明らかになっていない疑問が何かを発見するという方法です。

たとえば、入退院を繰り返す患者のセルフケア能力を向上させるために効果的なのはどのような介入なのだろうか、入退院を繰り返す患者の困難への



Bailey D (1999) / 朝倉隆司監訳 (2001). 保健・医療のための研究法入門——発想から発表まで. 東京：協同医書出版社.



Burns N & Grove SK (2005) / 黒田裕子, 中木高夫, 小田正枝, 逸見功監訳 (2007). パーンス&グロブ看護研究入門——実施・評価・活用. 東京：エルゼビア・ジャパン.

対処パターンにはどのような特徴があるのだろうか、といった疑問です。これらは、頭の中で想定されるだけでなく、臨床の場に置き換えても確認できることかもしれません。

いうまでもなく、研究の目標は、その成果が看護の場に還元されることにあるのですから、看護の場で実際に確認される疑問について追究することの意義は大きいわけです。

修士課程や博士課程の学生さんの多くが、研究目的を見つけ出す前にフィールドに出かけていくのは、この段階の作業を固めるためでしょう。

● 知識や経験の豊富な人から助言や支援を得る

2つ目は、〈研究課題〉として着目した概念に親しい人（同僚、先輩、教員、専門家など）と話をしたり、研究メンバーに加わってもらったりして、さまざまな助言や支援を得るという方法です。知識と経験が豊富な人々は、〈研究問題〉の明確化に必要な知識をあなたと共有し、助言者としての役割を果たしてくれるでしょう。

あなたが知りたいと思っていた疑問のうちのいくつかは、知識や経験が豊富な人から助言を得ることで、解決できてしまうものかもしれません。たとえば、アルコール性疾患患者の初回退院時における基本的な指導事項に関してあなたがもっている疑問は、先輩や教員、専門家が十分答えることができ、その答の妥当性も、次に述べる文献レビューによって容易に確認できることかもしれません。そのような疑問は、〈研究問題〉から除外されます。

● 文献検討を行う

3つ目は、〈研究課題〉として着目した概念に関連する過去の研究論文をいくつか読み、自分の関心領域で知られていることは何か、知られていないことは何かを把握する方法です。

あなたが知りたいと思っていた疑問のいくつかは、既存の研究論文で、すでに明らかにされていることかもしれません。そのような疑問は、〈研究問題〉から除外されます。また逆に、まだ明らかになっていない疑問が何かを、既存の研究論文をヒントに見つけ出すこともできるでしょう。

あなたが知りたいと思っていたものと近いことが、すでに明らかになっていたとしても、すぐにはあきらめないで！ 研究論文の最終ページにはよく

「本研究の限界」や「今後の課題」について言及されており、その研究領域で知識を強化するために必要な、今後の研究のための“勧告”(recommendations)が書かれていますので、ここをじっくり読んでみてください。 “勧告”は、〈研究問題〉の宝庫なのです。

1つの研究ですべてのことが証明されるということはまずありません。研究対象の数や性質、おかれた環境が異なれば、また別の結果が得られることは少なくありません。そのため、研究結果の信憑性を高めたり、結果の一般化の可能性を広げたり、理論開発につなげていくための追研究(研究の反復)が必要となります。

“勧告”は、たいいていの場合、反復研究の必要性や方法を具体的に示してくれているのです。

● 〈研究問題〉を練り上げる

以上のような方法で、〈研究課題〉から〈研究問題〉が引き出されたら、あとは自分の頭の中で次のように熟考し、〈研究問題〉を練り上げます。

- どの問題が看護にとって最も重要であるか？
- どの研究が、その分野にさらなる研究の基礎を提供する最も大きな可能性をもっているか？
- どの研究が最も実行可能(使える時間、費用、研究者の能力、対象や施設や設備の利用可能性、他者の協力、倫理的な問題などからみて)に思えるか？
- どれが最も魅力的か？

こうして練り上げられた〈研究問題〉のみが〈研究目的〉へとつながっていきます。

研究テーマは、このように、〈研究上の関心〉に気づき、〈研究課題〉を洗い出し、〈研究問題〉を明らかにして、〈研究目的〉を設定するという流れで、ていねいにしぼり込まれるのです。

4

〈研究目的〉を設定しよう

〈研究目的〉を導き出すプロセスとは

〈研究問題〉は、看護実践に関する知識のなかで、まだ明らかにされていない気がかりな領域であり、〈研究目的〉を引き出し、研究の展開を指示するものです。〈研究問題〉を明確にして、〈研究目的〉を導き出すプロセスについて、先にあげた例をもとにお話ししましょう。

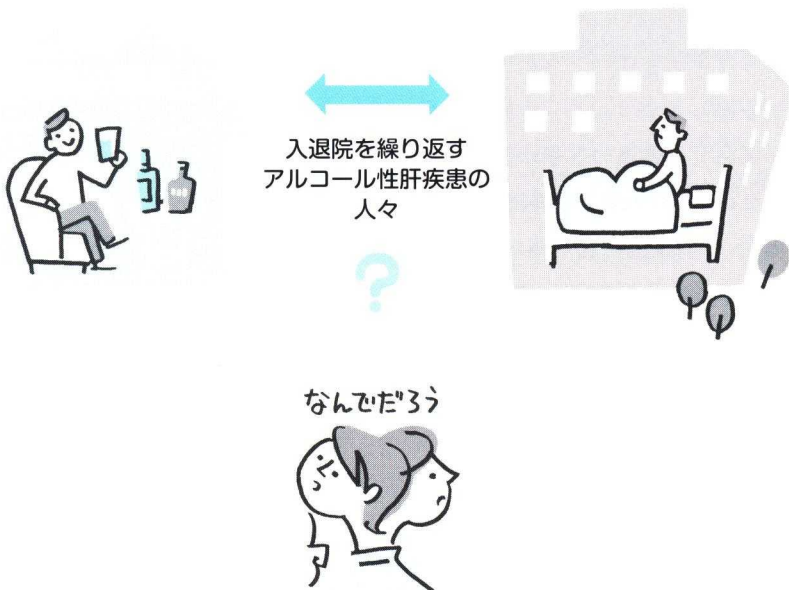
● 〈研究課題〉から〈研究問題〉へ

入退院を繰り返すアルコール性肝疾患の人々が入院中に、そして退院後に、どのような生活を送り、どのようなことを感じ、考えているのかについて、ほとんど何も知らないことが気にかかっているナースがいました。


そこで、“入退院を繰り返すアルコール性肝疾患の人々の体験”という〈研究課題〉に着目し、看護の場に置き換えて確認したり、知識や経験が豊富な人から助言や支援を得たり、文献レビューを行ったりして、その課題を掘り下げてみました。その結果、次のようなことが明確になりました。

- ①わが国では、アルコール性肝疾患患者の多くが年間数回の入退院を繰り返すこと
- ②それらの患者に対してナースがいだくイメージは決してよいものではないこと
- ③ナースは自分たちのかかわりが不十分であることが入退院を繰り返す一因ではないかと考えていること
- ④アルコール性肝疾患に関する多数の文献に欠落しているのは、入退院を繰り返すアルコール性肝疾患の人々が入院中や退院後にどのような生活を送り、どのようなことを感じ、考えているのかに関する知識であること

これらのことから、このナースは、「入退院を繰り返すアルコール性肝疾患の人々の体験、つまり、入退院を繰り返すアルコール性肝疾患の人々が、入院中や退院後にどのような生活を送り、どのようなことを感じ考えているかに関する知識の蓄積が少ないこと」を問題ととらえました。この問題が、〈研究問題〉です。



● 〈研究問題〉の陳述

〈研究問題〉は、〈研究課題〉をよりくわしく調べ、研究に値するものとそうでないものをより分けた結果明らかになってくる、研究で追究すべき特定の関心領域です。〈研究問題〉を選択したら、研究方法の検討に進む前に、形式ののっとなって、その問題陳述(問題を明確に述べておくこと)を行うことをおすすめします。〈研究問題〉を紙にくわしく明確に書きとめることで、あいまいな点や不確かな点が明確になることが多いのです(Polit & Beck, 2004/2010, p.73) .



Polit DF & Beck CT(2004)
/ 近藤潤子監訳(2010). 看護研究—原理と方法. 第
2版. 東京: 医学書院.

● 〈研究問題〉から〈研究目的〉へ

問題陳述を行ったことで、このナースはまだあいまいな点があることに気づきました。それは、“入退院を繰り返すアルコール性肝疾患の人々の体験”をどの視点からとらえるのかということです。ナースがとらえる患者さんのイメージではなく、患者さん本人の語りが必要不可欠であると、このナースは考えました。そして、最終的に導き出した〈研究問題〉は、次のようなものでした。

「入退院を繰り返すアルコール性肝疾患の人々が、入院中や退院後にどのような生活を送り、どのようなことを感じ、考えているか、すなわち、入退院を繰り返すアルコール性肝疾患の人々の体験についての、患者自身の語りをとおした知識の蓄積が少ないこと」

この〈研究問題〉を解決することが、〈研究目的〉となります。この研究の場合、「入退院を繰り返すアルコール性肝疾患の人々が、入院中や退院後にどのような生活を送り、どのようなことを感じ、考えているかを患者自身の語りから明らかにすること」、あるいは「入退院を繰り返すアルコール性肝疾患の人々の体験についての、患者自身の語りをとおした知識をつくり出すこと」が〈研究目的〉となるでしょう。

Point!

質的研究の〈研究課題〉〈研究問題〉〈研究目的〉の特徴とは

質的研究は、Step1で述べたように、患者さんをはじめとする研究参加者の目線で問いを発し、問いを明らかにしようとする点に特徴があります。そのため、その研究のフォーカスは、研究参加者自身の認識する世界にあたるものがほとんどです。

したがって、〈研究課題〉〈研究問題〉〈研究目的〉も、質的研究の場合、ある特定の人や集団の主観的観念や出来事、現象、文化、社会の一側面であることが多いです。これは、一般的な事柄や物質の量や性質、変数間の関係などにフォーカスをあてる量的研究とは対照的です。